

お 名 前	性 別	終戦時の年齢	現 住 所
松下のぶ子	女 性	20代 (不詳)	新城市海老

## 「中国人に命を救われて」

「東三河郷開拓団からの手紙」より

(部分修正)

私は、昭和19年春に満州国へ行きました。そして、15日間主人と一緒にい  
ましたが、主人は召集で兵隊に行き、私は主人の家族と沖秀という名の馬と、ト  
ウモロコシ、こうりゃん、小麦、野菜を作っておりました。三合屯の土地は肥料  
は何も入れなくても良くできました。また、スイカ、トマトも馬鈴薯も甘く、野  
菜はたくさんとれました。

20年8月終戦で、私たちの苦難が始ま  
りました。毎日匪賊に食糧、衣類を持って  
行かれ、着ている着物まで取られました。

1日に何回も匪賊がやって来ました。頭髪  
を切って男装して土下座をしました。ビヤ  
ンズという棒でたたかれ、じっと匪賊が去  
るのを待ちました。



農作業の様子 東三河郷開拓アルバムより

三合屯から東陽開拓団の学校にみんなで  
逃げていき、集団生活をしました。みんな少し持っていたお金を出して、粟、芋  
を中国人から買い、食べました。田んぼに刈り残された稲が少しあったので、そ  
れを刈り取り、手で一粒ずつ皮をむいて食べました。また、家の人についてきた  
犬を殺して食べ、骨もスープにして飲みました。体についているシラミを取って  
食べている人もいました。それほど食べるものがなかったのです。老人や子供が  
先に死に、若い人たちも倒れ、死んだ人を片づける人もいなくなりました。

そんな時、若い女の人を食糧と換えるといううわさ話が入り、私たちは2月の  
朝早く、東陽小学校から逃げ出しました。ノンジャンという氷の川を渡り、ラハ  
という村で日が暮れました。寒さと空腹で道に倒れ、凍死しそうになった時、中  
国人のロチャンという人が助けてくれました。私はその中国人の家で働かせても  
らい、男のような仕事をしました。朝早く5、60頭の牛を連れて、遠くの野原  
に枯れ草を食べさせに行くのです。中国語で右へ行け、左へ行けと言いながら進  
むのですが、私の下手な中国語など知らん顔で勝手に畑に入ってしまう、中国人  
にひどく叱られました。オオカミに子牛を捕られないように気をつけていました。  
オオカミの遠吠えがだんだん近くなってくると、とても怖かったです。5月末ま  
でそんな仕事をして、中国人から粟、こうりゃんを5升ほどいただきました。そ

れをご飯に炊いて、また火で固くなるまで煎りました。それを袋に入れて背負い、野宿をしながらチチハルへと歩きました。

もう少しでチチハルという所で食べるものが何もなくなり、私は道に倒れてしまいました。通りかかった町に住んでいる日本人が、豆腐を一丁買ってくれました。その人は、今チチハルは地獄だと言いましたが、何も食べ物がなく帰ることもできず、私はアンペラ小屋の収容所に入れられました。こうりゃんの粉味噌をかけた物を1日に1度、猫が食べるぐらいの量をくれました。毎日死んだ人が馬車に積まれて行くのを見ました。

昭和20年の冬、開拓団の人々がチチハルに来て大勢死ぬだろうと言って、町に住んでいる日本人が、大きな穴を二つも掘ってありました。土が凍ってしまうと、穴も掘るのが難しくなるからです。凍死した人たちは、カラカラと音を立てて穴の中に捨てられたと話していました。

私は、仕事を探して毎日歩きました。吉野屋収容所に行ってみましたが、まるで地獄でした。穴を掘って造った大きな便所は血の海のように、まだ少し生きている人の目、耳、鼻からウミが出ていました。食べ物を探しに川に行った時、川に捨てられていた人の生首を見ました。その時は腰が抜けるというのか、立ってはいられませんでした。今でも丸い石は嫌いです。

10日ほどで仕事が見つかり、立派な家の女中として働くことになりました。その家には第1夫人第2夫人と、1軒に奥さんが二人もいました。1日に15円か15銭だったか忘れましたが、1日2食付きでお金をいただき、私は元気になりました。その家のおばあさんの葬式がありました。おばあさんがまだ生きているのに、宝船のような棺桶が家の前に飾られていました。お葬式のごちそうには、豚の丸焼きとか肉、魚などがありました。そして、泣き女が棺桶の前で大きな声で泣いていました。

昭和21年9月頃、やっと日本に帰るときが来ました。無蓋車、屋根のない貨車に乗せられ、死んだ人は臭いので貨車から捨てられました。コロ島に着いたとき、アメリカの船が迎えに来ました。船からリンゴの歌が聞こえてきて、涙で何も見えなくなりました。

平成2年11月

(記録者 藤浪 睦子さん)